

経済予測専門家の月次予測集計からわかったこと

－ 11年間の ESP フォーキャスト集計の経験から

神奈川大学 飯塚信夫

概要

経済予測の評価に関する先行研究は内外で数多く存在する。また、海外では月次、四半期単位の予測評価も数多く存在する (Romer and Romer, 2000 など)。しかし、日本では Ashiya (2007) など年単位の政府見通しや民間見通しの分析を行った先行研究は数多くあるものの、月次、四半期単位の分析はほとんど存在しない。日本でも経済予測の集計は複数の機関で行われたきたが、年に 1 回ないし 2 回の集計であり、月次ベースの経済予測集計の歴史が浅かったことがその一因である。

ESP フォーキャスト集計は、日本で初めての継続的な月次ベースの予測集計である。2004 年春の開始以来、11 年強が経過した。ESP フォーキャストの登場により、月次ベースの経済予測の変化が確認できるようになったが、それをを用いた分析はまだ少ない (小峰他、2010 など)。

そこで、本発表では、GDP 成長率、CPI 上昇率、失業率、鉱工業生産変化率といった主要な経済指標の年次予測値を分析対象とし、下記の 3 点について検証を行った。

1. 実績値公表までの期間と、各経済指標の予測値の精度や、景気の方向性に関する予測の精度の関係
2. 予測修正の大きさ、頻度と景気の関係
3. 予測のばらつきの大きさと景気の関係

参考文献

- [1] Ashiya, M., 2007. "Forecast accuracy of the Japanese government: Its year-ahead GDP forecast is too optimistic," *Japan and the World Economy* **19**, 68–85.
- [2] Romer, C.D. and Romer, D.H., 2000 "Federal Reserve Information and the Behavior of Interest Rates," *The American Economic Review* **90(3)**, 429–457
- [3] 小峰隆夫, 伴金美, 河越正明, 吉田博, 2010 「我々は日本の経済予測専門家のサーベイ調査から何を学んだか-ESP フォーキャスト調査の 4 年間を振り返る」内閣府経済社会総合研究所『経済分析』 **183**, 104-125